

所属	言語文化研究科 日本語・日本語教育専攻 修士課程	修了年度	平成 27 年度
氏名	坂巻 守男	指導教員 (主査)	池田 広子

論文題目	「ために」と「ように」の習得過程における言語転移の研究 —中国語母語話者に焦点を当てて—
------	---

本文概要	
<p>中国語母語話者による目的を表す「ために」（以下「タメニ」と記す。）と「ように」（以下、「ヨウニ」と記す。）の区別（テストで満点を取るタメニ勉強する／テストで満点を取れるヨウニ勉強する）の習得を調査した。</p> <p>管見によればこれまでほとんど研究されていない日本語学習者の「目的を表すタメニとヨウニ」の習得について中国語母語話者を主な対象とし、さらに印欧語を母語とする日本語学習者及び日本語母語話者も対象に加え調査した。主節の主体が意志的に目的節の行為を表す場合にはタメニが用いられ、無意志的に目的節の行為を表す場合及び主節の主体と目的節の主体が異なる場合にはヨウニが用いられることが知られている。</p> <p>本修士論文では、中国語母語話者はタメニ・ヨウニの使い分けを習得する際に母語からの転移によるタメニの過剰般化を起こすことにより「タメニとヨウニ」の習得に誤用を多数産出しているかを明らかにするために①優先度タスク(稲垣 2009)による調査、②日本語学習者の作文データによる日本語コーパス調査を行った研究について記した。</p> <p>第1章では、研究理由として福田・稲垣(2013)「上級日本語学習者による目的を表す『ために』と『ように』の習得—「ために」の過剰般化は中国語話者に特有か—」について研究する中で、福田・稲垣(2013)において「タメニ」「ヨウニ」の受容度等が取り上げられ議論されているところから、また「タメニ・ヨウニ」の使い分けについては日本語母語話者にとっても関心がある事柄ともうかがえることを記した。</p> <p>既存の研究による問題点として、稲垣(2009)は「日本語と中国語の比較ならびに母語の転移とインプットの観点から中国語母語話者はタメニを過剰般化しこの過剰般化は上級レベルでも消えにくいであろう」「中国語話者は母語の影響により『為了=タメニ』と思い込みヨウニを使うべきところにもタメニを過剰般化する」「タメニの過剰般化はインプットの不明瞭さにより上級レベルの中国語話者の間でも消えにくい」と主張し、また福田・稲垣(2013)は「タメニの過剰般化が第一言語からの転移によるものなのか実証を試みた」としているが、稲垣(2009)及び福田・稲垣(2013)は優先度タスク(performance task)を用いた「学習者の目標構造に関する知識の調査に基づく」研究・議論であり、「実際の活用事例、例えば、日本語学習者による日本語コーパス等の調査に基づいた」研究ではないところに限界があると考えた。</p> <p>さらに稲垣(2009)は中国語母語話者が「ヨウニ」を習得する際に「為了」ではなく「怕」を用いて表すのが自然であると張(2008)を紹介しながら述べているが、筆者はそれを裏付けるデータが見当たらないこともあり以下について明らかにすることとした。</p> <p>第一に稲垣(2009)及び福田・稲垣(2013)の主張している「タメニ」と「ヨウニ」における中国語話者によるタメニの発語が母語からの過剰般化と言えるか検証することとした。</p> <p>第二に中国語母語話者によるタメニの過剰使用について、稲垣(2009)及び福田・稲垣(2013)における「タメニの過剰使用が中国語の『為了』との形式の類似性により引き起こされる」との主張の</p>	

妥当性について検証する。第三に中国語母語話者における「タメニ」の過剰使用の要因について、中国語以外の言語を母語とする話者との違いの有無について検証し第一及び第二の研究課題から得られる結果と併せて日本語を外国語として習得しようとする学習者への指導指針の一助を得たいと考えた。

第2章では「タメニ・ヨウニの用法」に係る先行研究を研究記述した。第一に先行研究の結果得られた「タメニ・ヨウニの正用及び誤用の判断基準」について記した。これは「言語コーパスデータ」の調査・分析及び「タメニ・ヨウニに関する容認度アンケート調査」の結果を分析する際に必要となるものである。第二に「容態を表すヨウニが目的を表し得るか事由」について研究した。中国語母語話者がタメニの過剰般化(稲垣 2009)をすとの主張に対してはその事由根拠を検証する上で必要なことと考えた。

前田(1992)は日本語教育の中での「目的」表現についての従来の見解として、「日本語教育の中で「目的」表現は比較的早い時期に導入される複文文型の一つであるがその目的節を表す代表的な形式「タメニ」と「ヨウニ」の使い分けの原則は基本的に主節の主体の「意志的な制御可能性」をキー概念として論じている。すなわち、主節(=後節)の主体が意志的に制御できる動作を目的とする場合従属節はタメニで表し、そうでない場合はヨウニを用いることになる」としている。筆者は前田(1992)のこの説明を踏まえ「目的節の行為を表す場合にはタメニが用いられ無意志的に目的節の行為を表す場合及び主節の主体と目的節の主体が異なる場合にはヨウニが用いられること」を『タメニ・ヨウニの使い分け原則』と本論においての定義として研究を進めた。

干(1997)は、動作の意志性やコントロール性、動作主の異同などに現れる「タメニ」文と「ヨウニ」文の違いはすべて、①動作を引き起こすことを目的にするか、②結果状態を生起させることを目的にするか、に由来するものと考えられると主張、梅岡・庵(2000)は「タメニ・ヨウニの使い分け原則」について、「タメニ」と「ヨウニ」の最も大きな違いは、前件の動詞、すなわち「タメニ」と「ヨウニ」の要求する動詞であり「タメニ」には意志動詞を、「ヨウニ」には無意志動詞を用いるとし、中島(2000)は「前件の述語動詞が無意志的に用いられる場合や前件後件の動作主体が異なる場合ヨウニが用いられ前件後件の動作主体が同じで前件の述語動詞が意志的に用いられる場合にはタメニが用いられる」すなわち「ナル事態」「スル事態」の対立を考えることでヨウニ・タメニの理解が容易になり日本語の他の文法現象の説明とも整合性のある的確な把握ができると主張している。

干(1997)、梅岡・庵(2000)、中島(2000)いずれにおいてもタメニ・ヨウニの使い分けについては、前田(1992)において紹介されている「タメニ・ヨウニの使い分け原則」を支持する主張をしているものと考察されることから、前田(1992)における「タメニ・ヨウニの使い分け原則」を前提として分析研究を進めた。

以上の先行研究を踏まえ以下の調査を行った。①準備調査として張(2008)が述べる「中国語母語話者が『ヨウニ』を習得する際に『为了』ではなく『怕』を用いて表すのが自然である」の可能性について簡易な調査を行う。②「タメニ・ヨウニ容認度調査」を実施にあたり調査対象者は中国語母語話者、英語・印欧語母語話者、日本語母語話者各々30名程度とする。③先行研究において今後の課題としている「コーパスによる調査研究」を実施するために「東京外国語大学作文コーパス JLPTUFS」(以下「東京外大コーパス」と言う。)及び「日本語学習者作文コーパス」(2010 科研グループ「自然言語処理の技術を利用したタグ付き学習者作文コーパスの開発」)を用いて「タメニ」及び「ヨウニ」を用いる文例(正用、誤用とも)を抽出し統計する。

リサーチクエスチョンとして①「タメニ」と「ヨウニ」における中国語話者によるタメニの発語が母語からの過剰般化と言えるか、②過剰般化と言えるならばその理由について中国語の『为了』との形式の類似性により引き起こされるものと言えるか、③中国語母語話者の「タメニ」産出について他の言語を母語とする話者との間に違いが有るか、を設定した。

第3章では研究方法について「タメニ・ヨウニ」の使用実態について、「日本語学習者による日本語作文コーパスデータ」及び「中国語・印欧語・日本語の各母語話者を対象とする「タメニ・ヨ

ウニの容認度の活用例文」を基に検討を進めたことを記した。

上述の準備調査「ヨウニ表現有無アンケート」の結果によると、「目的用法としてのヨウニ」の表現は検出できず、また中国語母語話者（目白大学大学院生 N1 レベル）へのインタビューで得た回避と推測できる回答、すなわち「ヨウニを使うことに自信がない場面ではタメニを使ってしまう」という回答を勘案すると中国語母語話者には目的語用法としてのヨウニに対する表現はないものと推察された。準備調査に先立つ事前調査として大学院生（中国語母語話者）を対象に「怕」を使った短文を母語及びその日本語訳を作成してもらった。結果は中国語では「目的用法のヨウニ」を意味する際に「怕」を用いて使用する例は1件もなく「怕」は怖い、恐れる、嫌う等の意味として使用されており、本研究で検討している目的用法としての「タメニ・ヨウニ」の正用誤用に関するデータとしては不利用が妥当と推察された。

本調査について、タメニ・ヨウニ容認度調査の質問用紙を作成し2度の予備調査を経て本調査を実施した。調査対象者は中国語母語話者（目白大学大学院生）、印欧語母語話者（埼玉大学講師、東京都・埼玉県内の公立高等学校における外国語指導助手、東京都・埼玉県における語学学校教師、ポーランドウッジ薬科大学院研究生）、日本語母語話者（目白大学学部生、埼玉県内の小学校教師等）である。

第4章では調査結果及び分析について記した。リサーチクエスチョン①の研究について「中国語話者によるタメニの発語が母語からの過剰般化と言えるか」に対する解を求めるため「東京外大コーパス」を用いた。当該コーパスのデータ数1515件、レベル800（超級）ファイルからレベル500（中級後半）ファイルまでのデータ672件を用いて、「タメニ」及び「ヨウニ」を含む文例をそれぞれ検索しExcelファイルとして一覧表化しデータを1件ずつの目視作業により、目的用法としての「タメニ」・「ヨウニ」を含む文例の抽出作業を行った。検定結果について4つのタイプであるタメニ誤用例、タメニ正用例、ヨウニ誤用例、ヨウニ正用例を用いてクロス集計カイ2乗検定の結果、有意確率は中国語母語話者、印欧語族、日本語母語話者ともに有意確率（両側） $P \geq 0.05$ 、有意差は無かった。

検定のまとめとして、中国語話者によるタメニの発語が母語からの過剰般化と言えるか、とのリサーチクエスチョンについて有意差はないという結果であった。これは本データ標本からは否定も肯定もできない、すなわちタメニの過剰般化が有るとも無いとすることも採用できないとの意味と考える。「為了」による過剰般化で有るとすることも、無いとするとも言えないことを意味している。結果は本研究の結論を考えるに当たり意義あることを示唆された。

リサーチクエスチョン②への解を求めるために『日本語学習者作文コーパス』（<http://sakubun.jpn.org>）を使用し為了の使用度調査データを収集した。被調査者（中国語母語話者）の作文を対象に目的用法として「タメニ」を使っている文を抽出しさらに当該文章の母語訳（中国語訳）を抽出「タメニ」と「為了」の照合作業を行った。すなわち「タメニ」について中国語文で「為了」を用いている文例を収集した。抽出分23の内、「為了」使用文11で、「為了の使用頻度調査結果」について、「母比率の区間推定」を用いてF分布を使って解析した。目的用法を表現する際の「為了」の使用率は信頼係数95%で26~70%の間にあると考えられ「タメニ」の過剰使用について「為了」の形式的類似性から来ているとする考え方は支持できないものと考えた。

リサーチクエスチョン③について「タメニ・ヨウニ容認度調査」を行い表1に示す値を得た。調査対象者は中国語母語話者、英語・印欧語母語話者、日本語母語話者各々30名程度とした。カイ2乗検定で有意確率3言語とも $p \leq 0.05$ であり有意差が認められた。

第5章では第4章までの調査研究を踏まえリサーチクエスチョンへの回答を記した。 **RQ1** 「タメニ」と「ヨウニ」における中国語話者によるタメニの発語が母語からの過剰般化と言えるか、については本データ標本からは否定も肯定もできない、すなわちタメニの過剰般化が有るとも無いとすることも採用できないとの意味と考える。「為了」という形式（語）による過剰般化で有るとすることも無いとするとも言えないことを意味している。**RQ2** 過剰般化と言えるならばその理由について中国語の『為了』との形式の類似性により引き起こされるものと言えるか、について『日

本語学習者作文コーパス』を用いて収集した「為了の使用頻度調査結果」について「母比率の区間推定」を用いて解析を行った結果「タメニ」の過剰使用について「為了」の形式的類似性から来ているとする考え方は支持できないものとの結論を得た。RQ3 中国語母語話者の「タメニ」産出に関して他の言語を母語とする話者との間に違いが有るか、についてカイ 2 乗検定により有意確率 0.000 \leq 有意水準 0.05 で帰無仮説棄却できる結果を得たことから、中国語母語話者の「タメニ」産出について他の言語を母語とする話者との間になんらかの違いがあると考えられる。

以上 3 本のリサーチクエスチョンについての検討結果から、中国語母語話者における「タメニの過剰使用」は中国語の母語の「為了」の転移によるものとする主張については支持できないものとの結論を得た。

考察として目的を表す「ヨウニ」という表現は中国語には直接的には存在せず、従って中国語母語話者にとって日本語学習上「目的を表すヨウニ」の使用難度が高くなり「タメニの誤用」及び「タメニを多用する回避」などの方略が取られやすくなるものと示唆された。目的用法としてのヨウニの表現、回避など第二言語習得上のストラテジー、自動詞・他動詞の有無、意志動詞・無意志動詞の有無、目標言語の中で転移しやすいものなど言語転移に関わると推察される要因について中国語、印欧語、日本語等を比較検討しながら今後の研究を進めていきたい。

引用参考文献

(コーパス)

「東京外国語大学作文コーパス JLPTUFS」 (東京外国語大学日本語教育センター)

李在鎬『日本語学習者作文コーパス』 (<http://sakubun.jpn.org>)

鎌田 修・山内博之『KY コーパス Version.2』

(第二言語習得関連)

稲垣俊史(2006)「第二言語習得研究と第二言語としての日本語習得研究」『言語文化学研究』

稲垣俊史(2009)「中国語を母語とする上級学習者による目的を表す『ために』と『ように』の習得」『日本語教育』

梅岡巳香・庵功雄(2000)「『ために』と『ように』に関する一考察」『一橋大学留学生センター紀要』

奥野由紀子(2003)「第二言語としての日本語習得過程における言語転移の研究」－「の」の過剰使用を中心として (風間書房)

千 日平(1997)「動作目的表現と結果目的表現」－[タメニ]と[ヨウニ]を中心に－『筑波日本語研究』第二号

迫田久美子(2002)『日本語教育に生かす第二言語習得研究』 (アルク)

迫田久美子(2007)「第二言語習得研究の深さと広がり」－学習者の学び方から教師の教え方へ－

中島孝幸(2000)「目的を表す構文について－ヨウニとタメニ－」『甲南大学紀要』

福田純也・稲垣俊史(2013)「上級日本語話者による目的を表す『ために』と『ように』の習得」－「ために」の過剰般化は中国語話者に特有か－『日本語教育』

森山 新(2001)「中間言語の化石化と第二言語習得のメカニズム」『世界の日本語教育』

(コーパス関連)

迫田久美子(2013)「日本語学習者の発話コーパスと動詞の発達」『国語研プロジェクトレビュー』

李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子(2012)『日本語教育のためのコーパス調査入門』 (くろしお出版) (統計学関連)

石村貞夫・石村光資郎(1995)『SPSS による統計処理の手順 第7版』 (東京図書)

石村貞夫・加藤千恵子他 (2013) 『SPSS によるカテゴリカルデータ分析の手順』 (東京図書)

内田治 (2010) 『すぐわかる SPSS によるアンケートのコレスポネンス分析』 (東京図書)